

〔論文〕

中韓日における「総角」文化

金 泰 虎

問題の所在

1．中韓日における総角の語彙

- (1) 中国
- (2) 韓国
- (3) 日本

2．前近代における総角の髪型

- (1) 中国
- (2) 前近代の朝鮮時代
- (3) 日本の「総角」と「美豆良」

3．冠礼と総角

むすびにかえて

問題の所在

東アジア（Asia）の中国・韓国・日本では、古来より「總角」という言葉を共通に有している。現在、漢字の繁体字を用いている韓国と台湾では「總角」、中国の簡体字では「总角」、そして日本の簡体字では「総角」と記す。簡体字を開発して用いる以前、東アジアの中韓日ではともに繁体字の「總角」と記していたのである。以下では、日本の簡体字である「総角」をもって記すことにする。

東アジア漢字文化圏における共通の総角は語彙だけではなく、男性をめぐる髪型や人生儀礼と深く関わっている。にも関わらず、今日の中韓日では男性の髪型や冠礼と関連している総角について、意外とその理解が薄い。つまり、総角の正確な意味、髪型、そして人生儀礼の冠礼と結び付けて論じている先行研究はほとんどなく、書物などでは断片的かつ概略的に取り上げているだけである。

例えば、韓国の『斗山百科』では、「朝鮮時代に男の子供の髪を頭の中央から2つに分け、頭の両側にまるで角のように結んだ形（下略）」とする¹⁾。日本の『大漢和辞典』²⁾では「あげまき、髪をすべ聚めて頭の両側に角の形にむすぶ小児の髪型」、一方『デジタル大辞泉』³⁾では「古代の少年の髪の結い方の一つ。髪を左右に分け、両耳の上に巻いて

輪を作る「角髪(つのがみ)」としている。要するに、『斗山百科』・『大漢和辞典』は、総角の髪型は頭に角のような2つの髪の結びであるという見解である。

しかし、『デジタル大辞泉』では、総角の髪型が角ではなく輪、その場所も頭の上ではなく両耳の上としている。つまり、総角の髪型は2つの角の形ではなく、輪ということである。このことは総角の髪型がどんな形であるのか明確な統一性がないことの証左と言える。さらに、いずれの説明においても子供、小児、少年の髪型ということから具体的にどんな人が対象なのか明確ではない。言い換えれば、総角という言葉の意味と髪型、そして人生儀礼の冠礼と結び付けての視点から論じられている研究がないということである。

したがって、本稿では総角の髪型と人生儀礼に関する分析が欠いていることを明らかにするため、韓国だけではなく、中国、日本における総角も含めて言葉の意味合い、髪型、そして冠礼と結び付けて、前近代を踏まえて総合的に追究を行うことにする。その分析に当たっては、中韓日における総角という言葉の意味合いと使用状況、髪型と冠礼の関わりの中での分析は欠かせない。そこで、中韓日の言葉、文献資料及び絵画資料を用い、総角の人生儀礼との関わりについての解明を目指して論を進める。

1. 中韓日における総角の語彙

中韓日の社会で用いられる総角という語彙の出典、それと関わる言葉を見つけ出し、その意味合いを明らかにする。

(1) 中国

総角の中国語の簡体字は「总角」、その発音は [Zongjiao] である。中国語には「総角之交」という慣用語があり、その意味は「幼い時からの親しい交際」である。このように、中国に総角という語彙が存在している。

中国において総角が最初に確認されるのは、最古の詩集の『詩経』である⁴⁾。その中の「齊風」の「甫田」(広い畑)という詩に総角の語彙が登場するが、引用をする。

無田甫田、維莠驕驕
無思遠人、劳心忉忉
無田甫田、維莠桀桀
無思遠人、劳心怛怛

キーワード：総角、丁髷、角髪、揚卷、みずら、チョンガー、双髻、双紒

1) 『斗山百科』(斗山出版社、2015年、韓国)では、「조선시대 남자 아이들의 머리를 가운데에서 2갈래로 나누어 머리 양쪽에 마치 뿔처럼 댄 모양(하락)」と記している。

2) 『大漢和辞典』(大修館書店、2000年)

3) 『デジタル大辞泉』(CASIO、2014年)

4) 『詩経』は、五経(『詩経』・『書経』・『礼記』・『易経』・『春秋』)の中の一つであるが、周代(BC1046～BC771)に作られたため『周詩』とも呼ばれる。

婉兮變兮、総角卬兮

未幾見兮、突而弁兮

甫田を田すなかれ、維れ莠驕驕たり。

遠い人を思うなかれ、労心忉忉たり。

甫田を田すなかれ、維れ莠桀桀たり。

遠い人を思うなかれ、労心怛怛たり。

婉たり變たり、総角の卬たり。

未まだ幾ならずして見れば、突として弁せり。

ここで注目したいのは、アンダーライン（Under Line）の「総角卬兮」である。総角は卬（かん）、つまり兩角のような髪型である。同じく『詩経』の「衛風」における「氓」（捨てられた女の嘆き）という詩でも「総角之宴」という語句が登場する。

なお、『礼記』の「内則」には「男女未冠笄者、雞初鳴、咸盥漱、櫛縱、髡髻総角、衿纓皆佩客臭」とあり、総角の語彙が使われている。その意味は、「冠礼や笄礼を行う男女は鶏が鳴く頃の早朝に起きて顔を洗い、髪をといて整理し、総角の髪型を施す。また彼らの服の結び紐には香りの巾着をつける」ということである。ここで、冠礼と笄礼に臨む男女は早朝に起きて髪を整え、総角の髪型にするとのことである。したがって、総角の髪型は冠礼と関わりがあることを示している。

このように、中国では古い時代から総角という語彙を用いており、それに関わる冠礼の文化が形成していたと考えられる。

(2) 韓国

韓国語でも中国と同様、総角という語彙があり、繁体字としては「總角」と記す。韓国語としては「총각」、その発音は [Chong gak] である。それは「結婚していない成年男子」⁵⁾ という意味であり、とりわけ男性に限って用いる語彙である。

韓国語には他にも「더벅머리 総角」（もじゃもじゃの髪の姿の総角）「処女總角」（未婚の女と男）「總角 딱지를 떼다」（男の童貞を捨てる）「總角은 나이가 몇이야?」（総角は何歳なの？）そして若い青年を呼ぶとき「總角!」といった語句と語彙がある。これらの総角は「結婚していない成年男子」の意味合いである。さらに、韓国の漬物の中でも総角という語彙を用いる「總角キムチ（총각김치）」がある。

しかし、「더벅머리 総角」における総角以外は、直接、髪型との関連性は薄く感じられる。兎も角、韓国社会において総角という語彙は、未だに日常の言語生活の中で使われている。

5) 『韓韓辞典』（東亜出版社、2013年、韓国）には、「결혼하지 않은 성인 남자」とある。

(3) 日本

日本語でも中韓と同じように総角という語彙が存在しているが、この「総角」は日本の簡体字である。それは[チョンガー] [Chong ga-]に加え、音読みとしては[そうかく] [So kaku]と発音する。音声学的に日本における[Chong ga-]は、韓国語の[Chong gak]という発音に酷似している⁶⁾。

ところで、日本語では中国語の「総角之交」と同じく「総角の好み」という慣用句があるが、「幼児期からの親しい交際」の意味である。なお、『源氏物語』第47帖のタイトル(Title)は「総角」と名付けられている。

このように、中国語に根源のある「総角」という語彙は、韓国に伝わり韓国語に定着し、さらに日本語に伝来したと見なして差し支えないと考える。そこで、中国の「総角之交」と日本の「総角の好み」における総角は幼い頃という時期は暗示する。しかし、これらの語彙における総角が髪の毛の結び方と関わっていることについては、ほとんど知る余地がない。

2. 前近代における総角の髪型

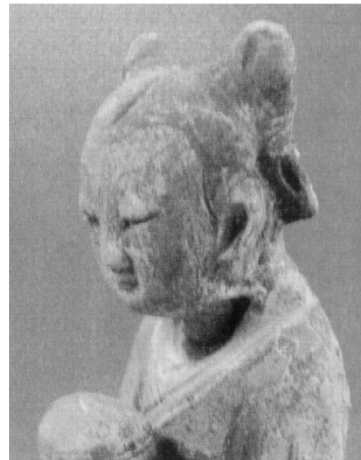
『詩経』と『礼記』から総角という言葉を確認してきたが、そこには髪型の意味合いが含まれている。その髪の毛の結び方は、いかなるものなのか明確にしていきたい。

(1) 中国

古代の中国では、髪の毛を左右2つの角のように纏めていたのを総角と呼んでおり、その髪型は羊の角のような形である。

(写真1)の唐時代の墓から発掘された土俑から、その髪型が確認できる。土俑とは、殉死者の代わりとして墓に埋葬した、土で焼いた人形である。この土俑の髪の毛は総角の姿である。その髪の毛の結び方は頭の頂部辺りに2つの髻を結ぶという特徴がある。

ところで、朝鮮時代(1392~1895)における儒学者の李穡(1680~1746)が書いた『四礼便覧』には、「司馬温公曰、古者二十而冠、所以責成人之礼也、近世以来、人情轻薄、過十歳而総角者少矣、今且自十五以上、俟其能通孝経論語、粗知礼義、然後冠之、其亦可也」⁷⁾とある。司馬温公(光)(1019~1086)⁸⁾は、



(写真1) 唐の土俑

6) 丹羽博之「日中韓国における漢語の意味と発音の変化：総角・愛人・知音の伝播と変容」(『大手前大学論集』11巻、大手前大学、2010年)44頁で、総角は植民地時代に韓国から伝わった言葉と推測している。

昔は20歳に冠礼を行い、成人としての礼儀に関する責任を負うようにするためである。最近の世は、人情が軽薄になり、10歳を過ぎた人で総角は少ない(ほとんど10歳の前に総角になる)。今後は、15歳以上になり、『孝経』と『論語』を通達し、礼儀がわかることを待って、しかるべき時期に冠礼を行うのがしかるべきことだとしている。つまり、古来以来の中国における総角の早期性の問題点について指摘をしている。特に、北宋時代(920～1127)に概ね早期に総角という髪結び方が行われていたことが朝鮮時代の史料からわかる。

しかし、その後、中国大陆において王朝が交代しつつ、王朝権力側から社会に求める風俗も王朝ごとに変化があったため、総角の髪型がいつ頃まで持続されたのか定かにすることはできない。

(2) 前近代の朝鮮時代

前近代の朝鮮時代における総角という髪型を紐解くため、伝来する朝鮮時代の絵画資料から実証して行くことにする。絵画は当時の実在と実情を表しており、総角の分析に有効であると考えられる。

『斗山百科』の総角を説明するくだりで、髪に毛に当たる部分だけを引用すれば、「朝鮮時代に男の子供の髪を頭の中央から2つに分け、頭の両側にまるで角のように結んだ形(下略)」とする⁹⁾。一方、「쌍상투(サンサンツウ)」という髪型があるが、韓国語の「쌍(サン)」は2つの意味の「双」、そして「상투(サンツウ)」は「髻」なので「二つの髻」、つまり総角、「双髻」、「双紒」と同じ意味である。

『毛髪学辞典』では、双紒について「頭の頂部の左右に巻き上げた2つの髻。高句麗時代から行われた結髪の形で朝鮮時代まで行われた(下略)」としている¹⁰⁾。要するに、前近代の朝鮮時代における総角の髪型は、(写真1)の唐時代と同じであるという理解で間違いはない。

そこで、その総角の髪型を確認することができる朝鮮時代の絵画資料を取り上げることにする。次の(写真2)は、日本宮崎県都城の都城島津邸が所蔵している『高麗虎狩図屏風』に描かれている総角である¹¹⁾。

(写真2)の屏風画の一部は文禄・慶長の役(韓国では壬辰倭乱・丁酉再乱という)に際し、文禄4(1595)年3月に島津義弘・久保父子の戦場での活躍から生まれたものである。当時、戦場の朝鮮に渡った島津父子の行動について、約100年が経過した宝永3(1706)年、島津家の子孫が義弘・久保父子の戦場での手柄を描いて残している。この功

7) 李緯『四礼便覧』(牛峯李氏大宗会、明文堂、2003年、韓国)261頁。

8) 司馬温公(1019～1086)は司馬光であり、北宋の政治家である。

9) 前掲『斗山百科』では、「조선시대 남자 아이들의 머리를 가운데에서 2 갈래로 나누어 머리 양쪽에 마치 뿔처럼 댄 모양(하락)」とある。

10) 『毛髪学辞典』(光文閣、2003年、韓国)では、「머리의 頂部 좌우에 들어 올린 2 개의 상투, 고구려 때부터 행해졌는데 結髮의 형태로 조선시대까지 행해졌다(하락)」とする。

11) 日本の宮崎県都城市にある「都城島津邸」という資料館が所蔵している屏風絵の一部であるが、2双の屏風である。



(写真2) 高麗虎狩図屏風
(都城島津邸所蔵)

續の屏風画は、南九州地方で絵師として活躍した永井慶竺(1685～?)に描かせた¹²⁾。屏風画は、後日、言い伝えに頼って描いたものではあるが、島津義弘・久保父子が秀吉に上納するため朝鮮の昌原で虎狩を行った様子がリアル(Real)に臨場感の溢れるように描かれている。

とりわけ(写真2)は、屏風画における虎狩り様子的一部分であるが、絵における左の総角の姿をしている朝鮮の青年が島津の率いる兵卒に虎の出没する場所まで案内をしている。この総角の姿は、時間が経過した時点で島津父子が経験した当時の様子を思い起こして描いたとは言え、非常に信憑性に満ちたものである。ちなみに屏風は、島津家の本家から都城に分家をした北郷家に伝来していたが、今は北郷家の資料を一括にして保管、管理している都城島津家邸の資料館が所蔵している。

次の朝鮮時代の(写真3)「松下問月」は、文人画家の沈師正(1707～1769)が描いたもので、1700年代半ば頃の作品と考えられ



(写真3) 松下問月
(澗松美術館所蔵)

12) 『みやこんじょ力の発信』(都城島津邸、2014年)34頁。

る。松の木を枕にして横になっている人が総角の髪型である。

(写真4)「西園雅集図」は、朝鮮王朝に仕えた図画署の画員である金弘道(1745～1806?)が1778年に描いた屏風画の一部である。絵の中では、多くの人が見られるが、印を付けている2人だけが総角の姿である。



(写真4) 西園雅集図
(国立中央博物館所蔵)

さらに、(写真5)「碧梧社小集図」は五老会帖に収録されている絵画である。1861年、朝鮮時代の図画署の画員である劉淑(1827～1873)が描いた作品である。茶の湯を沸かし



(写真5) 五老会帖 - 碧梧社小集図
(ソウル大学校博物館所蔵)

ている人が総角の髪型である。

他にも朝鮮時代における沈師正の「童子遊戯」(潤松美術館所蔵)、金弘道の「蕉園試茗図」(潤松美術館所蔵)、「商山閑談図」(潤松美術館所蔵)そして年代や作者未詳の「平生図」(婚姻式・三日遊歌・致任・回甲)(国立中央博物館所蔵)の絵画では、総角の髪型が確認できる。

このように、朝鮮時代における17～19世紀の絵画から総角の姿を確認することができる。しかし、大勢の民衆が集まっている様子を描いている絵画である金弘道の「씨름도」(シルムド)(相撲図)(国立中央博物館所蔵)、劉淑の「大快図」(1836年作)(ソウル大学博物館所蔵)には、総角の姿が見られない。この2つの絵画は多くの人々が集まり「씨름」(シルム)(相撲)を観覧するシーン(Scene)である。つまり、観覧する群衆の中では、(写真11)で見る「댕기머리」(デンギモリ)(編み垂らしている髪型)と(写真2)で見る丁髷の姿の人しか見えない。それは、朝鮮時代に平民は四礼(冠婚葬祭)における冠礼を軽んじ、冠礼を省く傾向が強かったため、(写真2)(写真3)(写真4)(写真5)でみるような総角の姿は見つからないと考える。

いずれにせよ、以上で取り上げてきた17世紀初頭から19世紀末の間に描かれた朝鮮時代の(写真2)(写真3)(写真4)(写真5)の絵画では、一貫して総角の姿が確認できるのである¹³⁾。

(3) 日本の「総角」と「美豆良」

日本では、総角と「あげまき」(揚巻)、さらには「つのがみ」(角髪)、「みずら」(角髪、角子)は同じ髪型と見なしている。「みずら」は、当て字として「美豆良」と記し、「びんずら」、「びずら」とも発音する。しかし、総角と「みずら」の髪型が同じであるということには疑問が残る。

すでに考察してきたように、総角は頭の頂部に羊の2つの角のような髷姿の髪型である。次の唐本御影の絵画から検討をしていくことにする。

(写真6)「唐本御影」は、別称として「聖徳太子及び二王子像」、または「阿佐太子御影」と言われるが、元来は法隆寺が所蔵していたものである。しかし1878年、皇室に献納されて、今は宮内庁の所蔵になっている。

絵は、聖徳太子が百済からの阿佐太子(???)を接見した際の姿を描いたものとの言い伝えがある。ちなみに『日本書紀』には、阿佐太子が推古天皇5(597)年4月に日本に渡って聖徳太子の肖像を描いたとする。この唐本御影の成立時期は8世紀頃と言われるが、12世紀半ばには大江親通(??1150)の『七大寺巡礼私記』に、その存在が確認される¹⁴⁾。中央の人物が聖徳太子(574～622)、左は聖徳太子の弟である殖粟皇子(???)

13) 宋宰鏞「壬乱前儀礼研究」(『東아시아(アジア)古代学』第20輯、東아시아(アジア)古代学会、2009年、韓国)351頁では、壬辰倭乱以前(1592)の士大夫(貴族層)は簡略な冠礼を行ったと見られるが、壬辰倭乱以降(1598)は正式に冠礼を行ったようだとしている。しかし、大勢の人々が集まっている絵画の場面に総角の髪型が確認されないのは、貴族層も冠礼を簡略化したり、軽視したりしていたことの表れと考える。それに加えて冠礼の際、すでに丁髷をする人が多かったとも考えられるが、絵画に総角の髪型が存在することから一概には言えない。

そして右は聖徳太子の子である山背大兄王（?～643）とされる。

丹羽博之は、総角という言葉の伝播と変容を論じる中で、（写真6）唐本御影から総角の姿を求めている。つまり、殖栗皇子と山背大兄王の髪型を総角と位置付けている¹⁵⁾。なお、『デジタル大辞泉』¹⁶⁾にも「みずら」は、「上代の成人男子の髪のかき方。髪を頭の中央から左右に分け、両耳の辺りで先を輪にして緒で結んだもの」と記しており、「みずら」と総角が同じ髪型であるとしている。しかし、角と輪の髪型、そして頭の頂部と両耳辺りに髪を結んでいるため、総角と「みずら」が異なる形であるのは明白である。

日本では、次の（写真9）の結び方をもって「総角結び」と名付けている。これが総角と「みずら」を同一視する間違いを引き起こす1つの要因になっていると言える。

考察してきたように、総角は頭の頂部、かつ2つの角のような形である。しかし、（写真7）の総角結びは、本来の総角の形とは異なる。（写真7）の輪の形は両耳辺りに結んでいるため、「みずら」の結び方と見なされよう。

総角と「みずら」の髪型が同じではないことについては、すでに稲葉小千が明かにしている。稲葉は、以下の（写真8）は「みずら」¹⁷⁾、そして総角としては（写真9）を名付けている¹⁸⁾。

（写真8）の上は、「みずら」姿の正面、下は後ろ姿の「みずら」であるが、（写真6）の殖栗皇子や山背大兄王の髪型と類似している。

ところで、（写真9）の総角は、角のような髻なので、結び方は髻を意味する「髻」ないし「紒」と同じである。そこで、総角はその髻が2つであるため、「双髻」ないし「双

みずら



（写真6）唐本御影
（宮内庁所蔵）



（写真7）日本の総角結び

14) 『七大寺巡礼私記』の法隆寺「宝蔵」に「俗人の姿をされた聖徳太子の肖像画一幅は、唐の人が描いたものである」とある。さらに、武田佐知子『信仰の王権聖徳太子』（中公新書、1993年）3～35及び101～115頁を参照されたい。

15) 前掲丹羽「日中韓国における漢語の意味と発音の変化：総角・愛人・知音の伝播と変容」43頁。

16) 前掲『デジタル大辞泉』

17) 稲葉小千『日本結髪史』（春陽堂、1918年）6頁。

18) 前掲稲葉『日本結髪史』12頁。



(写真8) 美豆良の髪型



(写真9) 総角の髪型



(写真10) 双髻の髪型

紵」とも言われる。双髻の髪型は、石原哲男が(写真10)のように提示している¹⁹⁾。

要するに、総角、双髻、そして双は2つの角の形で、その髻の位置が頭の頂部に位置しているため、輪の形で両耳の上に結ぶ「みずら」とは異なる髪型なのである。特に、前近代の日本には武家文化が社会に強く定着し、武家独自の文化が発達していた。その中でも冠礼は行われていたが、冠礼を迎えた青年に総角の髪型を施したのかどうかは定かではない。前近代の日本にも朝鮮時代と同様、公家と武家以外の民衆は冠礼を軽視する傾向であった。

3. 冠礼と総角

総角という儀礼は、古代の中日では確に行われたと考えられるが、いつ廃れたのか、その実態をつかむのは難しい。総角に関わる冠礼は行っても総角の髪型をさせたのか定かではないのである。

一方、実際に韓国で総角の儀礼が廃れてからは、まだ1世紀くらいしか経っていない。朝鮮の乙未改革による断髪令(1895)の発布から衰退して行くものの、日韓併合(1910)までも行われていた。

本章では朝鮮時代の史料に基づきつつ、前近代の朝鮮時代を中心に詳しく論証して行くことにする。

取り上げてきた諸辞書では、総角の対象者は概ね「小児、少年、未婚の青年」という説明である。しかし、総角は対象者だけではなくそもそも髪型の意味合いであり、人生儀礼の節目の冠礼に際し施した姿である。要するに、総角という髪型と、それに伴う人生儀礼の冠礼は深く関わっているのである。冠礼は、人が生まれてから一人前の人間、すなわち

19) 石原哲男『歴代の髪型』(京都書院、1989年)10頁。

成人（成年）として生きる第一歩を歩き出すという意味が強い²⁰⁾。

すでに引用した『詩経』の「甫田」には、冠礼を行った総角の成人から大人になるという過程が幽かに示され、人生の一端がうかがえる。詩の最後におけるアンダーラインの2行の節には、幼く美しい総角がそんなに時間が経たず会ったら、いつの間にかかんむり（弁）を被った大人になっているとつづっている。つまり、総角の髪型の時期（成人）に会い、短い時間が経過してはかんむりをかぶる大人になっていたということである。

このように、冠礼という人生儀礼の際は、総角の髪型へ外見の変化が伴う。しかし、前近代の朝鮮時代には、冠礼を迎えた男の子の髪型の変化は多岐にわたる。その多岐性については、次の（表1）に示した通りである。

（表1）前近代の韓国における髪型の変化

番号	髪型の変化過程		
	幼児（童子：어린이）	冠礼（成人・成年）	婚礼（大人：어른）
①	땡기머리(デンギモリ)	総角	丁髷
②	땡기머리(デンギモリ)	A 丁髷	丁髷
③	땡기머리(デンギモリ)	땡기머리(デンギモリ) B	丁髷
④	땡기머리(デンギモリ)	땡기머리(デンギモリ)	丁髷
⑤	땡기머리(デンギモリ)	丁髷	丁髷

（表1）における髪型の変化は、人生の節目の儀礼である冠礼に現れる。童子（韓国では「어린이（オリニ）」（子供）という）の髪型は、「땡기머리（デンギモリ）」（編み垂らしている髪型）である。この姿は、次の（写真11）書堂図から確認をすることができる。絵の中央の奥に座っている訓長（先生）と右列の奥の人だけを除けば、ほかの全員の童子は「땡기머리」である。この絵は、朝鮮時代の画員である金弘道の作品である。ちなみに、朝鮮時代の書堂は今日の初等教育を担う機関と同じ役割を果たした。

そこで、幼児という用語は、ほかにも児童、子供、少年、小児、童子などとも記されるが、以下では童子を用いる。なお、冠礼を済ませた成人（成年）は、今日の青年というイメージ（Image）で良からう。

（表1）の①にみる髪型の変遷は、「땡기머리(デンギモリ)」→総角→丁髷という順序であり、総角は冠礼（今日の成人式）を行う際に取り入れた髪型である。そこで、「땡기머리(デンギモリ)」から総角の髪型にするためには、下げ髪の前につけるリボン（Ribbon）を解さないといけなが、それをもって「땡기풀이(デンギプリ)」（リボン解し）という。

前近代の朝鮮では王族や貴族層のような高い身分の子弟に限り冠礼を行う傾向が強く、①の総角の過程が具現化されることが多かった。①の総角の過程を取り入れた場合、（写真2）（写真3）（写真4）（写真5）でみるように、頭の頂部辺りに角のような2つの髷

20) 日韓において幼少期から冠礼を行うと、名前、社会の認識などがどう変わるのかについては、金泰虎「日韓社会における成人 冠礼の時系列的考察」（『言語と文化』第21号、甲南大学国際言語文化センター、2017年）を参照されたい。

を結び上げる。ちなみに、朝鮮王朝における王世子の冠礼にも「쌍둥계 (サンドング)」(双童髻)の髪型にすると定めている²¹⁾。この冊礼とは、王世子を冊封する儀式である。言及してきたように、「쌍둥계 (サンドング)」も双髻であるため、総角の髪型と同じであると見なして差し支えない。

劉光洙は、「朝鮮時代には結婚をしてこそ丁髻をすることができ、歳が多くても結婚をしていない総角は丁髻をすることができない。さらに総角の髪型の人に対し、丁髻の姿の若い子がぞんざいな言い方をしても欠礼ではなかった」²²⁾とし、冠礼における①の過程を暗示している。

次に、朝鮮時代の中期頃、李緯の書いた『四礼便覧』には冠礼の「始加祝辞式」・「再加祝辞式」・「三加祝辞式」という式次第を行う前に「将冠者、双紒四揆衫勒帛履在房中南面」、そして「如其向跪、為之櫛、合紒(儀節)包網巾訖」と記している²³⁾。まず、総角の髪型をしてから、すぐに「合紒」の髪型に変えて「網巾」をかぶせる。そこで、「双」ではなく「合」の紒なので髪型は丁髻である。

この『四礼便覧』の冠礼過程のように、李文周は冠礼の「準備節次」段階で総角の髪型を行い、その次に「本行事段階」の中で三回行う加礼、とりわけ始加礼の際、丁髻の髪型にする²⁴⁾。つまり、(表1)でみるように、Aの段階で総角の儀式を行う。冠礼の儀式で総角と丁髻の2つの髪型をするということである。ちなみに、丁髻は(写真2)でみる通りの髪型である。

前近代における民衆の間で四礼(冠婚葬祭)の中で冠礼は軽んじ、総角の髪型を行わない場合、(表1)の③④のいずれかの過程を選択することになる。例えば、③の過程を選択した場合、結婚式を控えて1週間前、あるいは3日～4日前にBの過程を設定して丁髻にするケース(Case)がある²⁵⁾。つまり、Bの期間に髪型を丁髻にするのである。

朝鮮時代に冠礼を重視しなかった平民の暮らしを鑑みると、④の過程を取り入れる人が多かったと考える。これは冠礼を行わず、婚礼の際、丁髻にすることである。

ところで、朝鮮時代には⑤の過程が一般的だったと見なしている研究者もいる²⁶⁾。冠礼の段階から丁髻の髪型にするということである。しかし、⑤に加えて②の過程は、従来、言われてきた冠礼は成人、婚礼は大人という構図が1本化され、童子からいきなり大人になる意味合いである。

21)『国朝統五礼儀補序礼』巻之1、「吉礼」に「王世子、冠礼前、幘服制度」とある。そして『増補文献備考』巻79、礼考26、「顯宗八(1668)年定王世子冠制双童髻双玉導空頂幘」による。

22) 劉光洙「우리 고전 비틀기 <2> (我々の古典捻り <2>)」(『月刊朝鮮』2月号、朝鮮 뉴스 프레스(ニュースプレス) 2016年、韓国) 438頁。

23) 前掲李緯『四礼便覧』266頁。なお、271頁には「将笄者、双紒衫子、房中南面」とあり、女の子の笄礼にも双紒の髪型を行うが、総角とは言わない。

24) 李文周「성인식으로서의 관례의 구조와 의미분석(成人式としての冠礼の構造と意味分析)」(『儒教思想研究』第17輯、韓国儒学学会、2002年、韓国) 31～43頁では、冠礼について「準備節次」、「本行事段階」、「終結段階」という3段階に分けており、なお本行事段階に行う3回の加礼は、「始加礼」・「再加礼」・「三加礼」としている。

25)『韓国風俗誌』(乙酉文化社、1971年、韓国) 208～209頁。

26) 尹炳奭「冠礼와笄礼(冠礼と笄礼)」(『仁荷』第13、仁荷大学校、1976年、韓国) 72頁では、冠礼は⑤の過程である。



(写真11) 書堂図
(国立中央博物館所蔵)

(写真11) 右列の奥の人は丁髷の上に「갓(カツ)」という帽子をかぶっているため、一般的には結婚をしている大人(韓国では「어른(オルン)」という)と考えられる。冠礼から婚礼(結婚)に至る期間が長い人の場合は、「갓(カツ)」の代わりに「草笠」(草・竹・わらで編んだ帽子)をかぶった。このような総角をもって「草笠童」と呼んだ²⁷⁾。それは、冠礼を行った総角の髪型は成人、結婚をして丁髷という髪型は大人という意味の証と言えよう。

(写真11)の真ん中に座っている訓長と呼ばれる先生に教わる生徒の姿は、(表1)の幼児(童子)の「땡기머리(デンギモリ)」なのか、それとも冠礼を済ませた成人(成年)の「땡기머리(デンギモリ)」なのか、定かではない。早婚の風習が強かった朝鮮時代であることを鑑みると、「갓(カツ)」をかぶる生徒と他の童子姿の生徒との歳の差はそれほどなく、ほぼ同じ年頃であると考えられる。しかし、「갓(カツ)」をかぶっている生徒は、(表1)の婚礼(大人)の過程に進んでいるとみなされる。

伝統的に髪型によって「땡기머리(デンギモリ)」は子供扱い、総角は成人扱いで他人からの言葉使いも「-해라(ヘラ)」「-세요」調(ぞんざいな言い方)から「-하게(ハゲ)」「-šinaさい)調(略待の言い方)に変わる²⁸⁾。丁髷の姿の人は歳に関係なく、当時の社会では完全に大人扱いをしていた。要するに、前近代の韓国では、「땡기머리(デンギモリ)」は子供(童子)、冠礼の総角は成人、婚礼の丁髷は大人という認識を持っていた。

ところで、「땡기머리(デンギモリ)」の姿は前近代ではなく近代国民国家成立期、さらには現代に入っても見ることができた。韓国では(写真12)のように、「땡기머리(デン

27) 李恩珠『安東地域伝統服飾』(安東大学校博物館、1996年、韓国)100頁。

28) 宋宰鏞「韓国の儀礼(韓国の儀礼)」(『国文学論集』16、檀国大学校国語国文学科、1999年、韓国)152頁、そして李曦載「韓国の伝統冠礼の成人の意味(韓国の伝統冠礼と成人の意味)」(『東洋礼学』第5輯、東洋礼学会、2000年、韓国)139頁。



(写真12) 開化期の書堂

ギモリ』の姿があった。次の(写真11)は前近代の書堂風景と類似している光景である。

(写真12)は、朝鮮の開港(1876)以降、西洋からもたらされたカメラ(Camera)で撮った写真である。開化期(1876~1910)に撮った写真であると考えられる²⁹⁾。(写真11)と同じく「땡기머리(デンギモリ)」姿の童子は訓長からの教育を受けている。しかし、朝鮮王朝は乙未改革の一環として断髪令(1895)を実施することによって西洋式の髪型を取り入れ、建前として伝統的髪型の「땡기머리(デンギモリ)」は総角、「丁髷」は大人ということは廃止されるが、その後も地域によっては伝統的髪型が残っていた。

前近代の韓国で総角をめぐる文化、とりわけ髪型がいつから始まったのか、定かではない。但し、冠礼に関する最初の記録は、高麗の光宗16(965)年であり³⁰⁾、王太子の元服礼を行ったのである。冠礼と総角の髪型をセット(Set)と見なした場合、総角の髪型は高麗時代に遡れることになる。

しかし、(表1)で見てきたように、冠礼を行ったからと言って必ず総角の髪型を施したとも限らず、いくつかのパターン(Pattern)がある。(表1)の②③⑤のように、「땡기머리(デンギモリ)」から「丁髷」へと直接移行することもあるからである。

一方、日本語に総角という語彙があるように、日本の前近代に総角の文化が存在していたのは確かである。古い事例としての冠礼は、承安4(1174)に源義経(1159~1189)が行ったということであるが、総角の髪型をしたのかは不明である。明治4(1871)年に散髪脱刀令が出され³¹⁾、明治6年には明治天皇の断髪で西髪が流行しはじめ、伝統的な髪型は姿を消すようになった。しかし、総角の髪型が上代のいつから始まり、いつ頃に消えたのか、正確に断定するのは難しい。

29) 『사진으로 보는 朝鮮時代 생활과 풍속 (写真でみる朝鮮時代 生活と風俗)』(서문당(ソムンダン) 1993年、韓国)から引用した写真である。

30) 『高麗史』(巻2)。高麗時代に行われた冠礼については、金恵京「韓國 冠礼와 그 服飾 研究(韓國の冠礼とその服飾の研究)」(『韓服研究』第5巻、第1号、韓服文化学会、2002年、韓国)45~47頁を参照されたい。ところで、前掲『毛髪学辞典』では、高句麗時代から総角の髪型が行われたとしているが、確かな立証が伴っていない。

31) 「太政官」(第399、明治4年8月9日)

さらに、中国も日本と同じ状況であった言えよう。総角という語彙は紀元前の周代に、その髪型は唐代には確認されるが、正確な成立と廃止の時期は特定できない。中国では西洋風の髪型の普及が遅く、1911年、清帝国の打倒を目指す辛亥革命軍が断髪令を公布したことから本格的に西洋風の髪型が始まる。

このように、前近代には総角という髪型は冠礼と密接に関わっていた。そこで、冠礼は身体的条件、家門（一族）の事情、健康状態などを総合的に考えて行った。成人として行動できる身体的成長と知識、一家や一族に喪中などの出来事があった場合には冠礼を行うかどうか、考慮の項目になっていた³²⁾。そのため、前近代の中韓日の社会における冠礼は一定、かつ一律に定めた暦年齢（Chronological Age）³³⁾に基づいて行うのではなく、概ね機能年齢（Functional Age）を取り入れたため、8～20歳という幅があったのである。しかし、西洋の影響が強まるにつれ、中韓日の社会では法律で定めた暦年齢をもって成人とした。さらに、時期を異にしながらも西洋式の髪型を取り入れ、徐々に伝統的髪型とは終焉を迎える方向に向かって行った。

むすびにかえて

東アジアの中国・韓国・日本では、古来より総角という文化が共通している。しかし今日、東アジア漢字文化圏の中韓日では、総角の意味合い、そして総角が髪型と男性の冠礼と深く関わっている文化であることについての理解は薄い。そこで、本稿では総角という言葉の意味と髪型、ひいては冠礼と結び付けて総合的視点から究明した。

総角に関する最初の出典は『詩経』である。それは髪を2つの羊の角のように左右に纏めた姿であるが、唐時代の土俑から総角の様子が確認できる。そして、総角という言葉は中国だけではなく、韓国、日本でも使われていた。

朝鮮時代の文献では、中国の司馬温公の話を引用しており、そこから北宋時代にも総角が行われていたことが確認できる。ところで、総角は単純に髪型ではなく、冠礼と関わっている。総角文化の軽視ということの裏を返せば、人生儀礼の冠礼という儀式を軽んじたことになる。幼少年時代には髪を結い垂らす「땡기머리（デンギモリ）」であるが、冠礼に当たって総角の姿に変えて青年になる。朝鮮時代の絵画資料から総角の髪型の男子が確認されるが、実際、平民身分の人は冠礼を省く傾向が強かった。言い換えれば、この傾向によって「땡기머리（デンギモリ）」の童子から丁髷の姿へ、すなわち総角という成

32) 前掲金泰虎「日韓社会における成人 冠礼の時系列的考察」97頁。

33) Benjamin Bell, M. D. (1972). SIGNIFICANCE OF FUNCTIONAL AGE FOR INTERDISCIPLINARY AND LONGITUDINAL RESEARCH IN AGING. *Aging and Human Development*, Volume 3, Number 2, pp.145-147. ここで Benjamin Bell は、人の年齢を暦年齢（Chronological Age）と機能年齢（Functional Age）に分けており、本稿では、この分類に基づいた用語を用いることにする。前者は暦に基づく年齢で、例えば成人を一律の20歳に定めることである。一方、後者は人の能力と機能による年齢であるため、例えば逆立ちができる年齢は6歳、場合によっては10歳になるのである。したがって、機能年齢は一律の暦年齢に比べて年齢のばらつきがある。

人の過程を経ず、いきなり丁髷の大人になり、人生儀礼における総角という髪型の位置づけも認識も希薄になった。

さらに近代国民国家成立期以降、総角の髪型は西洋式の髪型の影響によって、その姿は消えてしまった。冠礼（成人）は国家権力が定めた法律をもって一律の暦年齢で区切られ、前近代における総角と冠礼の関連性はなくなった。

要するに、前近代における中国発祥の冠礼の総角文化にみる髪型は、コリア（Korea）半島、さらに日本列島まで伝わり、近代国民国家成立期以降は、その形が消滅しつつも中韓日の言葉だけには残っている。

ところで、日本の一部では総角の髪型に因む総角結びと美豆良を混用することがある。明確に示せば、総角結びは頭に羊の角のような2つの結髪であり、美豆良は耳当たりの両側に輪の形で結ぶ髪型である。